

相手に、勝とうとして思い切って向かっていった。日頃、ともすればエネルギーを持てあまし気味になるM児が生き生きした場面であった。

④精神発達的には仲間遊びの段階にあるが対人関係がもちにくい児童について

発達検査において、「発語」及び「対人関係」を除く、その他の事項について、ある段階まで達した自閉児がこれに該当する。見通しをもたせつつ、児童の好きな活動を通して、友だちと共同したり、競争したりする場면을段階的に作り、指導していくことが必要である。

ア. 集団の中に入ってジェンカを踊ることができたF児

これまで、集団の中で活動することを嫌い、先生の目を盗んでは、離脱していたK児であるが、生活单元「運動会」の中の1つの題材であるジェンカでは、このようによい表情で踊っている姿が見られた。体を動かす楽しい活動が媒体であることも考えられるが、これまで集団参加する時間を少しずつ延ばし、負荷の与えかたをスモールステップで配慮してきた成果であると考えられる。



以上のように児童の発達段階に応じて、様々の「からだを動かすことを楽しむ子」という児童のからだ像をみることができた。

【7】 考察と今後の課題

本研究に取り組んで、本年で4年目、最終年次を迎えることとなった。1年次2年次は研究の骨子づくりをし、3年次から実践を充実させるべく「授業づくり」に取り組んできた。

からだづくりを目指した単元や題材の選定及び配列、年間指導計画の作成、そして個が生きる授業の工夫（同一教材・複数課題、複数教材・同一課題の検討）をし、より良き授業を指向して実践を積み重ねてきた。子どもたちから学ぶ姿勢を大切にしながら実践を続け、4年を経て、この研究実践の成果として次のような事項を挙げるができる。

1つは、具体的な動きのある活動（遊び活動）が媒体となる授業がなされ、子どもたちが、よりダイナミックな活動を進んで行うようになってきたことである。2つめは、小学部の実態にあったからだづくり、換言すればムーブメント教育を理論的背景とする感覚運動の発達を目指したからだづくりを行ったことにより、凹凸や歪みはあるものの児童の発達のスケールを大きく伸ばすことができたことである。さらに、3つめには、「なかよしタイム」での遊びの指導、また各教科・領域で遊び活動がふんだんに行われたことにより、からだを動かすことを楽しむ児童が増えてきたことを挙げるができる。このように一応の成果はあげられた。

しかし、残された課題もいくつかある。1つは、長期的な見通しのもとに着実に積み上げの指導計画の作成であり、2つめは、伸びてくる児童をどのような評価法で評価するかという問題である。さらに3つめは、発達のみならず障害に視点をあてたからだづくり養訓の充実を挙げるができる。

本研究で築きあげたものを小学部教育の糧としてさらに加えていくとともに、さらなる小学部教育の充実を目指して新しいテーマを模索していきたいと考える。